

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520214

研究課題名（和文）ヘンリー・ソローにおける野性の詩学の研究

研究課題名（英文）A Study on Thoreau's Poetics of the Wild

研究代表者

高橋 勤（TAKAHASHI TSUTOMU）

九州大学・大学院言語文化研究院・准教授

研究者番号：10216731

研究成果の概要：

本研究課題（平成 18～20 年度）の期間中、2 度の海外研修（カリフォルニア大学デーヴィス校、ハーヴァード大学）を行なったほか、論文 5 件、研究発表 6 件、編著書 1 件、事典（分担執筆）1 件の成果を得た。さらに、この研究成果の一部から着想された「ソローの愛した子供たち—超絶主義思想と教育改革」が科学研究費基盤研究 C（課題番号 21520262、平成 21～23 年度）に採択された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	360,000	2,260,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ語系文学

キーワード：ヘンリー・ソロー、ラルフ・エマソン、超絶主義思想、コンコード

野性の詩学

1. 研究開始当初の背景

(1) 前研究課題「南北戦争前における奴隷解放運動とコンコードの文学」（課題番号 15520188、平成 15～16 年度）では、19 世紀中盤マサチューセッツ州で展開された奴隷解放運動を検証し、ソローやエマソンの文学

との関連を考察した。その際筆者が念頭に置いたことは、従来アメリカン・ルネッサンスの文学として神話化されたソローとエマソンの文学を 19 世紀の政治思想との関連において歴史化し、コンコードの精神風土と知的交流から産み出された過程を考察すること

であった。

(2) 本研究課題においても、エマソンとソローの文学を歴史化しマサチューセッツ州コンコードにおけるコミュニティの文学として捉え直す作業を進めた。特にエマソンとソローの詩学を考察することにより、アメリカにおけるロマン主義文学の萌芽と超絶主義思想とのかかわりを検証した。今回特に注目したのは、ソローにおける「野性の詩学」という問題である。従来、ソローにおける「野性」の思想は、おもに自然と文明という二項対立の観点から捉えられてきたが、実際に”Walking”において展開されたのは、あらゆる文化・文明の基盤にある野性という考え方であり、文学的想像力がそうした自然（野性）の活力に大きく依拠している事実であった。

(3) ソローの「野性の詩学」を受け継ぎ共有した文学者に、アメリカの現代詩人ゲーリー・スナイダーがいる。さらに、言語における身体性という観点からすると、メルロ＝ポンティの哲学に、エコロジー思想との関連でいえば、デーヴィッド・エイブラムの『感覚の魔術』(*The Spell of the Sensuous*, 1996)にも通じる。そうした「野性の詩学」の系譜について考察を深めるのが本研究課題の目的である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、ヘンリー・ソローにおける「野性の詩学」について考察することである。ソローは、エッセイ「歩行」(“Walking”)において、アメリカ文化を形成する基層としての自然（野性）の意義を語り、「野性」という概念を中心とした文学論を展開している。エマソンの観念論と言語

観を受け継ぎながら、それを「野性の詩学」へと発展させたソローの文学的軌跡を検証することが本研究課題のねらいである。

(2) 前研究課題につづいて、エマソンとソローの文学を歴史化しマサチューセッツ州コンコードにおけるコミュニティの文学として捉え直す作業の一環だが、特にエマソンとソローの詩学を考察し、超絶主義思想との関わりを論じる。その意味において、この課題はソローの詩学の分析を通して、より幅広く19世紀中盤のマサチューセッツ州コンコード周辺における文化史を検証することを目的とする。

(3) ソローの「野性の詩学」に大きな影響を受けた現代詩人にゲーリー・スナイダーがいるが、その著書『野性の実践』(*The Practice of the Wild*)を検証することにより、文化活動の基盤としての自然（野性）という思想について考察する。自然の多様性と言語・文化（想像力）の多様性は密接な相関関係にあり、神話や伝説など、文化の自然発生的な側面を考察する。

3. 研究の方法

(1) 平成18年度は、ソローの“Walking”を起点として、野性という概念を中心とした詩学の成立と、その文学および文化史的な意義について考察したが、その過程で超絶主義思想やアメリカ文化史関係の書籍を購入した。さらに、冬期に10日間のスケジュールでカリフォルニア大学デービス校図書館において資料収集を行なった。

(2) 平成19年度については、ソローやエマソンらの超絶主義者、およびゲーリー・スナイダー関係の貴重な資料を購入したほか、夏

期休暇中に2週間ハーヴァード大学ワイドナー図書館で研修および資料収集を行なった。ハーヴァード大学では、特に19世紀に出版されたマサチューセッツ州コンコードに関する歴史書を閲覧し複写した。また、ハーヴァード大学滞在中に、ソローやエマソンの故郷コンコードを訪れる機会を得たのも貴重な体験であった。というのも、本研究課題はソローやエマソンの文学を19世紀中盤におけるコンコード周辺の文化的・宗教的風土に置き直し「コミュニティの文学」として読む作業の一環であり、その意味においてコンコードの文化的風土を体感できたことはきわめて有意義であった。

(3) 平成20年度はソローの言語観について考察し、言語や哲学に関する書籍を購入した。また、ソローにおける「野性の詩学」を現代に受け継いだゲーリー・スナイダーの作品を考察する過程において、スナイダーの著作集および研究書籍を購入した。平成20年度はこの研究課題の最終年度にあたり、Carl Bode 編 *Collected Poems of Henry Thoreau* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1970) に収められたソローの詩を精読し、特に一人称の主語に着目して詩を分類した。

4. 研究成果

(1) 平成18年度に『シリーズもっと知りたい名作の世界3「ウォールデン」』（ミネルヴァ書房、2006）を共編著として刊行した。その論集に収めた論文「境界の文学—『ウォールデン』論」において、ソローのエッセイ”Walking”に展開された「野性の詩学」の原型がソローのニューヨーク在住期間の日記において書かれた事実を指摘し、ソローにおける自然と文明の「境界」の意義を論じた。

(2) 平成19年度日本ソロー学会におけるシンポジウム「エマソンの現代的意義」（司会高梨良夫、講師高橋勤、堀内正規、小沢奈美恵）において「野性の詩学の系譜学—エマソンからゲーリー・スナイダーへ」という研究発表を行なった。さらに、発表の内容に加筆して「野性の詩学の系譜学—エマソンからゲーリー・スナイダーへ」『ヘンリー・ソロー研究』34号（日本ソロー学会、pp. 31-40, 2008年）を発表した。この論文は、エマソンの *Nature* (1836) において示唆された原生自然の文化的な意義という議論を起点として、ソローの”Walking”における野性論、さらにソローの野性論の影響を強く受けた現代詩人ゲーリー・スナイダーの野性をめぐる文化論やデーヴィッド・エイブラムの *The Spell of the Sensuous* に示唆された想像力のエコロジーという概念について考察したものである。

(3) ソローの自意識と自然の表現という問題に関して、「自己の詩学—ソローにおけるエゴイズムの諸相」（九州アメリカ文学55回大会、於 琉球大学、2009年5月9日）という研究発表を行なった。Carl Bode 編 *Collected Poems of Henry Thoreau* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1970) に収められたソローの詩を分析し、特に一人称の主語の使用をめぐって、ソローの詩における「経験」の重要性を論じた。ソローにおける「自己」の意識と自然の描写のリアリティとの関連について考察した。

(4) マサチューセッツ州コンコード周辺における文化史研究の一環として、前研究課題に引き続いて、奴隷解放運動とソローの文学の関連について考察した。その成果として、「ジ

ジョン・ブラウンとコンコードの文人たち」科研報告書「ジョン・ブラウンの屍を越えて：南北戦争とその時代」（課題番号 16520171）pp. 38-63, 2008 年、「ソローと暴力—ジョン・ブラウン弁護への一考察」『アメリカ文学研究』No. 45(2009), pp. 1-16、また、口頭発表として、「マサチューセッツにおける奴隷解放運動」九州アメリカ文学会（於九州大学、2006 年 5 月 13 日）、「ジョン・ブラウンとコンコード」九州アメリカ文学会シンポジウム（於九州大学、2007 年 5 月 13 日）を行なった。

(5) さらに、マサチューセッツ州の文化史研究の一環として、超絶主義思想と教育改革運動についての関連を論じた「ソローの愛した子供たち—超絶主義思想と教育改革」日本英文学会第 80 回大会（於 広島大学、2008 年 5 月 24 日）という研究発表を行ない、プロシーディングズに掲載した。この発表に基づく研究課題が科学研究費基盤研究 C（課題番号 21520262、平成 21～23 年度）に採択された。また、ナサニエル・ホーソーンのコングレゴーション在住経験と超絶主義者の交友を論じた「ホーソーンとニューイングランドの作家たち」日本ホーソーン協会九州支部（於 福岡大学、2009 年 3 月 28 日）という研究発表を行なった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- (1) 高橋勤「境界の文学」『もっと知りたい名作シリーズ 3 ウォールデン』ミネルヴァ書房、2006 年、pp. 56-66.
- (2) 高橋勤「野性の詩学の系譜学—エマソン

からゲーリー・スナイダーへ」『ヘンリー・ソロー研究』（日本ソロー学会、査読有）34 号（2008）、pp. 31-40.

- (3) 高橋勤「ジョン・ブラウンとコンコードの文人たち」科研報告書「ジョン・ブラウンの屍を越えて：南北戦争とその時代」（課題番号 16520171）（2008 年）、pp. 38-63.
- (4) 高橋勤「ソローの愛した子供たち—超絶主義思想と教育改革」第 80 回大会 *Proceedings*（日本英文学会、査読有）（2008）、pp. 17-19.
- (5) 高橋勤「ソローと暴力—ジョン・ブラウン弁護への一考察」『アメリカ文学研究』（日本アメリカ文学会、査読有）45 号（2009）、pp. 1-16.

〔学会発表〕（計 5 件）

- (1) 高橋勤「マサチューセッツにおける奴隷解放運動」九州アメリカ文学会、2006 年 5 月 13 日、九州大学。
- (2) 高橋勤「ジョン・ブラウンとコンコード」九州アメリカ文学会シンポジウム、2007 年 5 月 13 日、九州大学。
- (3) 高橋勤「野性の詩学の系譜学—エマソンからゲーリー・スナイダーへ」日本ソロー学会シンポジウム、2007 年 10 月 12 日、広島経済大学。
- (4) 高橋勤「ソローの愛した子供たち—超絶主義思想と教育改革」日本英文学会第 80 回大会、2008 年 5 月 24 日、広島大学。

- (5) 高橋勤「ホーソンとニューイングランドの作家たち」日本ホーソン協会九州支部、2009年3月28日、福岡大学。
- (6) 高橋勤「自己の詩学—ソローにおけるエゴイズムの諸相」九州アメリカ文学55回大会、2009年5月9日、琉球大学。

〔図書〕(計 2件)

- (1) 高橋勤共編著『もっと知りたい名作シリーズ3 ウォールデン』ミネルヴァ書房、2006年、総167ページ
- (2) 高田賢一、久守和子他編著『英米文学事典』(項目担当) ミネルヴァ書房
2007年、総830ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 勤 (TAKAHASHI TSUTOMU)
九州大学・大学院言語文化研究院・准教授
研究者番号：10216731